平成３０年度　全国高等学校総合体育大会（東海総体）　大会総評

報告者：高体連技術委員　川口青陵高校　山田純輝

平成３０年８月６日～１３日にかけて三重県で開催された全国高等学校総合体育大会に本県から昌平高校と浦和南高校が出場した。３大会連続出場となる昌平は、優勝候補の一つとして挙げられ、注目度も高かった。１回戦で高知中央（高知県代表）に、６－１と快勝。２回戦は優勝候補の青森山田（青森県代表）に２点ビハインドから４－２と大逆転勝利を飾った。３回戦でも、札幌大谷（北海道第１代表）に２点ビハインドから３－２と逆転勝利を飾り、勝負強さを発揮した。準々決勝では大津（熊本県代表）に２－１と競り勝った。準決勝で桐光学園（神奈川県第２代表）に２－３で敗れ、３位という結果であった。９年振りの出場となった浦和南は、１回戦で松本国際（長野県代表）に、０－０から PK４－２で勝利。２回戦は優勝候補の東福岡（福岡県代表）に０－３で敗れ、２回戦敗退であった。

昌平は、１－４－２－３－１の布陣で、ショートパスとロングパスを併用しながら主導権を握るポゼッションスタイルは全国でも健在であった。DF とボランチでパス交換しながら FW の動き出しに合わせて相手 DF の背後や楔のボールを配給し、前線のコンビネーションを生かしてゴールへ迫った。ビルドアップ中に SH がインサイドにポジションを取り、空いたスペースに SB がオーバーラップするなど厚みのある攻撃を展開した。県予選からミドルシュートの意識と精度が高くなっており、今大会でもその成果が出ていたように思う。効果的にミドルシュートを打つことで相手 DF を引き出し、バイタルエリアをワンツーで攻略して多くのチャンスを作り、ゴールにも繋げた。攻撃の中心は、今大会準々決勝で２ゴールの活躍を見せた DH⑧原田。効果的な縦パスや推進力のあるドリブルで攻撃のスイッチとなり輝きを放った。県予選でも得点源となった RSH⑦木下もサイドで起点となり自らゴールを決めるなど攻撃を牽引した。途中出場ながら試合の流れに変化を加えた LSH⑩須藤の存在も大きく、独特のリズムのドリブルは観客を魅了した。その他、FW⑪森田や OH⑨渋屋の関係性も良く前線で起点を作り、OH⑨渋屋は大事な場面で持ち前の決定力を発揮し３位入賞に大きく貢献した。守備は、ＣＢ⑤関根を中心にコンパクトフィールドを形成し、FW の相手 DF への規制に対して全体が連動したプレッシングをかけてサイドや中盤でボールを奪う。バイタルエリアをケアすることで自由に縦パスを入れさせなかった。攻撃でボールを保持していることが多く距離感が良いため、攻守の切り替えも早く相手の攻撃を自由にさせなかった。中でも、DH⑥丸山のポジショニングや危機察知能力が高く、相手の攻撃の芽を摘んでいた。

１回戦の高知中央戦は、ポゼッションを高めて常に主導権を握り、サイドやバイタルをショートコンビネーションで攻略し６点を奪い快勝。２回戦の青森山田戦は、戦前の予想通り攻守のインテンシティの高い好ゲームとなった。序盤は、経験や個人技で上回る青森山田に対し、やや守勢に回り CK から先制を許した。その後も個人技から技ありのミドルシュートで失点し早々に２点ビハインドとなる。前半のうちに LSH⑩須藤を投入し、流れを変えようと試みる。OH⑨渋屋や LSH⑩須藤が相手 DF と DH の間でボールを受けられるように

なり、バイタルエリアやサイドでのショートコンビネーション、ミドルシュートで徐々に流れを引き戻した。前半終了間際に、RSH⑦木下がバイタルエリアをワンツーで突破し冷静に流し込んで１点返した。後半も相手の間延びしたスペースを効果的に使い、コンビネーションから OH⑩渋屋が同点ゴール、RSH⑦木下が逆転ゴールを決めた。後半アディショナルタイムには、相手 GK も上がってきた CK を跳ね返し、FW⑪森田が単独ドリブルから無人のゴールに流し込んで４－２で大逆転勝利を飾った。３回戦の札幌大谷戦も苦しい展開となる。相手の積極的な前線からのプレッシングに思うように主導権を握ることができず、ショートカウンターを受ける場面が多くなり、前半０－１で折り返す。後半立ち上がりに素早いサイドチェンジに対応することができず失点し０－２となる。途中出場の FW⑮大和と LSH⑩須藤が流れを引き寄せる。FW⑮大和が DF の背後へ動き出して中盤にスペースを作り、LSH⑩須藤が前向きで仕掛けてサイドからリズムを作った。サイド攻撃で獲得した CK から RSB③吉田、CB⑤関根がヘディングで立て続けに得点を挙げ同点。終盤に右サイドのクロスから OH⑨渋屋が押し込み３－２。２試合連続２点差をひっくり返して劇的勝利を飾った。この試合で３名が負傷交代したが、崩れることはなく層の厚さを見せた。続く、準々決勝の大津戦も激闘をものにした。互いに攻守の切り替えが早く、インテンシティの高い試合となった。後半まで途中まで試合は膠着状態であったが、攻撃の起点となっていた DH⑧原田が自陣からのドリブル突破でＰＫを獲得し、自ら決めて先制。大津のロングボール中心の攻撃に押し込まれる時間が増え、逆にＰＫを与えてしまい同点とされた。しかし、終了間際に相手のクリアミスを拾った DH⑧原田がバイタルエリアをワンツーで突破し決勝点を決めて２－１とし、またしても劇的勝利を飾った。準決勝の桐光学園戦は、雷の影響で後半途中、長時間中断を挟む難しい試合となった。自陣で守備ブロックを形成し、ロングボールでのカウンター狙いの相手に対して落ち着いて対応し、ＤＦから丁寧にビルドアップしながらリズムを作った。前半のクーリングブレイクで LSH⑩須藤を投入し、LSH の⑪森田をＦＷに配置する形で変化をつけた。FW⑪森田のＤＦの背後への動きだしによってできた中盤のスペースで OH⑨渋谷やＬＳＨ⑩須藤がボールを受けられるようになり、ドリブルやミドルシュートで多くのチャンスを演出するが得点には至らない。後半開始から桐光学園の守備が機能し始め、エースＦＷ⑩西川を起点に鋭いカウンターから決定機を作られる。悪い流れを断ち切れないままＣＫから失点し、さらに立て続けに２点を許し０－３。その後、後半の半ばで雷により４時間半試合が中断された。攻めるしかない昌平は再開と同時にＦＷ⑮大和を投入し、攻撃の姿勢を強める。直後に FW⑪森田が１点返し、その後も一方的にボールを支配しながら猛攻を続ける。後半アディショナルタイムに LSH⑩須藤がさらに１点を返したが体を張ってゴール前を固める桐光学園の前に一歩及ばず、２－３で準決勝敗退となった。

浦和南は、１－４－１－４－１の布陣で、前線からの積極的なプレッシングでボールを奪い、手数をかけずにゴールに迫る堅守速攻のスタイルでゴールに迫った。FW や SH の動き出しに合わせてロングボールを配給し、前線に起点を作って中盤が素早くサポートするこ

とで厚みを出した。ロングボールだけではなく SB が高い位置を取りながら中盤３枚が良い距離感でテンポ良くパスをつなぎ、サイドに展開してサイド突破からのクロスでも多くのチャンスを演出するなど攻撃のバリエーションも多かった。攻撃の中心となったのは、武器である左足とテクニックで攻撃の中心となった OH⑩大阪。中盤でキープ力を発揮し全体を押し上げる時間を作り、セットプレーでも良いボールを配球してチャンスを演出した。守備は、強豪相手にも臆することなく、前線から連動したプレッシングを見せ、高い位置でボールを奪ってショートカウンターにつなげる場面も多く見られた。中でも CB④相馬の対人の強さや DH⑥鹿又の危機察知能力が効いており、本来は前線の選手である両 SB⑧草野、⑨狩集の献身的な守備も目立っていた。

１回戦の松本国際戦は、雷雨の影響により３時間遅れてのキックオフとなった。立ち上がりからサイドの高い位置で起点を作ろうとロングボールを配給するが孤立してしまい攻撃の糸口が作れない。滑りやすいピッチに両チーム共に効果的な攻撃ができずに前半終了。後半、３名の選手を投入して攻勢に出た浦和南が徐々に流れを引き寄せる。相手 SB の背後を何度も突破し、クロスからチャンスを作るもののフィニッシュの精度を欠き、０－０のまま PK 戦へ。PK 戦をものにして初戦突破を決めた。２回戦の東福岡戦は、実力で上回る相手に対して前線から積極的なプレッシングをかけて高い位置でボールを奪ってショートカウンターを仕掛けるなど自分たちのスタイルを貫いた。相手のスピードのあるサイド攻撃に苦しめられるも中央をしっかり固めてクロスを跳ね返し、決定的なチャンスを許さなかった。それだけに一瞬の隙を突かれてゴール中央での FK を許し前半に失点したのが悔やまれる。後半も押し込まれながらもチャレンジ&カバーを徹底して CB④相馬を中心にゴール前で体を張り、追加点を許さない。OH⑩大阪にボールが収まった時には、全体が押し上がり両サイドから突破を試みるがなかなかシュートまでは至らない。後半終盤にミドルシュートから失点し、直後に３点目を奪われ０－３で敗れ、２回戦敗退となった。

大会全般を振り返ると、優勝した山梨学院や準優勝の桐光学園を筆頭にチーム全体でハードワークし、エースが輝きを放ったチームが勝ち上がった印象がある。猛暑のため、クーリングブレイクや選手交代も試合の流れを変える重要なポイントであったことも特徴的であった。また、雷雨や強風、高温という難しい状況に加えて、７０分という短い試合時間も考慮し、リスクを負わずにロングボールで相手陣地に起点を作って得点を狙うチームが多く見られた。その中でも昌平は、自陣から意図を持ってビルドアップし、常に主導権を握りながらコンビネーションを活かして攻め続ける魅力的なサッカーを展開した。ロングボールに頼り、技術や判断に課題が多いチームが多い中での昌平のポゼッションスタイルは特に目立つ存在であった。ただ、５試合で９失点という数字を見ても失点が多かったことが今後の大きな課題であろう。ロングボールに対する対策や DF と GK 間の連携が安定してくれば全国制覇も現実味を帯びてきそうである。

本県代表の昌平、浦和南の両校は、チームのスタイルを全国の舞台で遺憾無く発揮し、素晴らしい戦いを披露した。今大会の経験や悔しさをバネに課題を改善し、冬の全国高校サッ

カー選手権大会での活躍を期待したい。